

異世界コーヒー

中・2 宮澤 実李

「着いた…」

私が今いるのは

愛知県発祥の某大手コーヒーチェーン店

母が急にコーヒーを飲みたいと言いだし、心の中でガッツポーズをした

食いしん坊な母から生まれた私もまた食いしん坊なのだ

「カランコロン…」

幸せのベルと共に店に入った

「いらしゃいませ。こちらの席へどうぞ」

店員の一言がワクワクの異世界へいざなう案内されたのはコーナー席だった

落ち着いた当たり席

私はまた心の中でガッツポーズをした

はやる気持ちを抑えて席に座った

早速メニューへ手を伸ばす

メニューを見るとそこには魔法陣がびっしり書かれてある

好みの魔法陣を選び店員へ呪文を唱えた

「カフェオレをください」

「一、五倍のたっぷりサイズを…」

店員が去った後

店内を見回した

新聞を読んでいる白髪の男性

会話に花を咲かせているマダムたち

子どもを連れたファミリー

みんな幸せそうに異世界を楽しんでいる

コーヒーの香りただよう空間に身を置くと体の底からパワーがみなぎってくる

「今なら世界を救える」

そんな中二臭いことを思っていると

「お待たせしました」の声と共に目の前にコーヒーと「トースト」が置かれた

「トースト？」

そうだ！

午前十一時まではモーニングの時間だった

異世界はどこまで私を幸せにしてくれるのだろう

コーヒーをすすり

トーストをかじった

茶色の幸せがお腹と心を満たしていった

この世の全てにありがとう
ごちそうさまでした…